

# 和光幼稚園 『劇の会』の取り組み

後藤紀子 所員／現代人間学部准教授

## — はじめに

本研究は、和光幼稚園における年長児最後の活動である『劇の会』の取り組みについて、実践課程を追うことで共同的活動、さらに協働的学びとして保育の展開と教師の援助を分析・考察することを目的とする。

幼稚園の劇指導はさまざまである。台本があり、決まったセリフを覚えて演じていくものや、レコード劇というできあがった劇の流れに乗ってそのレコードに合わせて劇を行なうもの、オペレッタやミュージカルのように音楽がリードして進められていくもの、また指導者がリーダーになりイメージの世界に子どもたちを引っ張って子どものイメージを膨らませていくものなど、さまざまな形があげられるであろう。

和光幼稚園・和光鶴川幼稚園も長年にわたり『劇の会』という取り組みが行なわれている。その実践課程を観察させていただいたところ、大きな3つの特徴が浮かび上がった。

- ①文学指導を丁寧に行なっていること。ここで言う文学指導とは、絵本の原作がありその読みを大切にしていることである。
- ②劇づくりに際し、子どもの日常の様子や思いを大事に考えていること。劇遊びを通してセリフを導き出し確立していくことで、劇遊び・劇づくり・脚本作りが一体になっている。
- ③本番があるということ。和光幼稚園では、3歳児から劇遊びの活動を行っており、ごっこ遊びから発展させ楽しんでいる。しかし、舞台上に上がり『劇の会』として発表会を行なうのは年長児だけである。『劇の会』発表は、まず土曜日に全園児の前で行ない、翌日曜日は、そのクラスの保護者のみに観客を制限して発表会が行なわれる。せっかく完成度の高い劇を行なうのだからたくさんの人に見てもらおうのがよいのではないかと思うのだが、

ここには子どもたちがこの取り組みを通して獲得していく経験を大事にはぐくむための配慮がたくさん隠されている。また、この劇をつくっていく課程で子どもたちは、達成感、充実感などの楽しいことも多々経験するが、時には挫折感やプレッシャーなどの重圧からの葛藤や繰り返し苦難を乗り越えていかなければならない体験をしていくことになる。

以上の3点を柱に展開実践例を上げ考察していきたい。

## 1——研究の方法

### 1-1 研究の方法

2011年度星1組大和教諭の『おもち一つでだんまりくらべ』<sup>1)</sup>、星2組藤田教諭の『おんちよろちよろ』<sup>2)</sup>、また2012年度星1組大和教諭の『わらしべちょうじゃ』<sup>3)</sup>、星2組林教諭の『番ねずみのヤカちゃん』<sup>4)</sup>と2年にわたり週に2日～3日ほど取り組みを見学させていただいた。今回は主に『おもち一つでだんまりくらべ』と『番ねずみのヤカちゃん』に焦点を当てて分析する。

見学をしている間にメモによる記録とデジカメでの撮影(2012年のみ)を行なうとともに、それぞれのクラスで保護者宛に配られている学級通信、劇の取り組みについての学期末総括を見せていただき資料とした。この『劇の会』の期間、各クラスに補助教諭1名が入り子どもたちの自由な意見などのメモをとっている。教諭によってはビデオも回し子どもたちの言葉を拾っている。子どもたちの言葉を拾っていくことにより、劇が進められていくのでこれらの記録はとても重要なものとなる。そして、それを連日学級通信で保護者に配信し家庭でも今のように劇がつくられていくのかを把握してもらい幼稚園とともに子どもを支え一つの劇をつくりあげていく。

また、2011年度の劇の会の終了後、和光幼稚園副園長の大瀧教諭と星組担当の大和教諭、藤田教諭に和光大学(現東京大学)の浅井氏と筆者が『劇の会』に関するインタビューを行なった。2012年度の劇の会の終了時には星組担当の林教諭にも筆者のみでインタビューを行なっている。これらをもとに事例をあげ検討していく。

なお、倫理的配慮として、和光幼稚園の園長、副園長、各担任の教諭の同意、了解を得るとともに、子どもの名前はすべてアルファベットで記述する。

- 
- 1) 『おもち一つでだんまりくらべ』作・大川悦生/絵・二俣英五郎 絵本子どものくに©ポプラ社
  - 2) 『おんちよろちよろ』再話・瀬田貞二/絵・梶山敏夫 こどものとも 福音館書店
  - 3) 『わらしべちょうじゃ』作・西郷竹彦/絵・佐藤忠良 ポプラ社
  - 4) 『番ねずみのヤカちゃん』作・リチャード・ウィルバー/訳・松岡享子/絵・大社玲子 福音館書店

## 1-2 劇の会の概要

### 4週間の流れ

年長を担当する教諭は、幼稚園最後の大きなイベントである『劇の会』の題材をどの絵本にするかを決め職員会議にかけ決定している。これは年長担任としてプレッシャーになるそうである。1月最終週あたりから4週間にわたり劇の会の活動がスタートする(表1参照)。

### 文学指導について

和光幼稚園では、絵本を読むことを文学指導という。1~2人に1冊の絵本を渡し絵本の細かい部分にも気づき意見を交わしていく。教師の発問も大事な指導の一つである。和光幼稚園で行なわれた1988年第12回公開研究<sup>5)</sup>に基調提案として、山内<sup>6)</sup>が『生活と結びついたことばの力を育て、豊かな文学体験をどう保障していくか』と記しており、1972年の第5回、1980年の第10回に引き続いての提案であったとされている。山内は、5歳児の文学指導からの「劇づくり」の課程は、文学作品をより深く感じ取り読み取るのに大変有効な活動と述べている。これらの資料は、教材研究もたくさん書かれており、和光幼稚園の文学指導の歴史を感じる。

また、太田、浅井の「1960-1980年代のインタビューから浮かび上がる実践史研究の課題について」<sup>7)</sup>の中で、和光幼稚園・和光鶴川幼稚園の教員であった山内は、子どもとともに創作した劇の実践の魅力を『ごんぎつね』の実践例をあげて熱く伝えている<sup>8)</sup>。また山内は「劇づくりをやると、そこまで読み込んでいなかったなと思うようなことが、劇をつくる課程で、つまり体を動かす課程でわかってくる。」と述べており、筆者は「このような劇の成立が、当時和光幼稚園

表1 劇づくり計画(1月最終週から4週間)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
1 週目	文学指導①	文学指導②	文学指導③	場面作り (劇遊び)	⇒		
2 週目	場面作り (劇遊び)	場面作り 保育参観	場面作り (劇遊び)	⇒	⇒		
3 週目	⇒	⇒	⇒	役決め	役決め		
4 週目	初めて舞台 へ上がる	衣装着て練習	⇒	舞台の袖に 入って通し 練習	部分練習	全園児の前 で発表①	保護者の前 で発表② (本番)

5) 和光幼稚園 第12回公開研究集会 主題「生活と結びついたことばの力を育て、豊かな文学体験をどう保障していくか」1988年1月31日

6) 山内和子 1966年~1992年和光幼稚園・和光鶴川幼稚園教諭、93年より園長を務める。

7) 太田素子・浅井幸子 研究プロジェクト「近代日本の保育実践史研究」保育記録の分析に基づく歴史研究の試み 『東西南北2012』和光大学総合文化研究所年報2012年147-178頁

8) 同上、157-160頁

における徹底した教材研究によって支えられていたことを示唆している。」と結んでいる。現在和光幼稚園では、ここまでの教材研究は行なわれていないと思われるが、過去の歴史の積み重ねを十分に感じ取れる。

## 2——大和教諭クラス星1組『おもち一つでだんまりくらべ』の取り組みより

### 2-1 文学指導

あらすじ

となりからお餅を7つもらった

じいさんとばあさんは一つずつ食べていったが一つ余った。

そこでだんまりくらべをやり先にしゃべった方が負け、勝ったらお餅が食べられる。

やることがないので布団に入っていると、ねずみがやってくる。お餅を食べそうになるので床をたたき追い返す。次に泥棒がやってくる。物を盗むが、じいさんとばあさんは声を出せない。最後にお餅に気がつき食べようとする。ばあさんが思わず「こらああ、どろぼう！」と声を出し負け、じいさんが美味しそうにお餅を食べおしまい。

最初に読み聞かせをした後、2人に1冊ずつ本を渡し、一頁ずつ絵をじっくり見ながら、その本から伝わってくることを読み込んでいく文学指導が行なわれていく。昔話であればその風景がどうなのか、じいさんとばあさんの服装や家の中はどうか？ 今の自分の家との違いは何か？ などを見つけていくことでそのお話の一番大事な背景や登場人物の心の動きなどを読み取っていく。絵を見ながらクラス全体で意見を出し合い共感していくことで、ただ読み聞かせをするだけでは読み取れないものを獲得していくことになる。そしてこの文学指導が、劇づくりの大事な基盤になる。

学級通信では文学指導の様子が記載されている。その一部を記述する。

星1組文学指導 学級通信「どきどき」

2012/2/13 No.91

『おもち一つでだんまりくらべ』10頁がたがた ごとっ！とさっきよりよっぽど おおきいおとがして、だれかがそーっとはいつてきました。

A : おばあさんどろぼうかなって考えている。

B : おじいさん、おばあさん目をま



大和教諭の文学指導の様子

んまるくしている。よくみるため。

C : 「なんか音がする」よく見ている。

D : どろぼう見るのは初めてだったから「はっ」としているんじゃない？

E : どろぼうの鼻がとんがってる。

F : どろぼうがそうっと歩いている。

みんな：ほんとうだ……

担任：なんで、そうっと歩いているんだろう？

G : 気づかれないようにだよ。

H : つま先で歩いているから、そうっとなんだ。

I : どろぼうも目を丸くしている。

J : 初めて来た家だから目が丸くなっている。

K : もしかして人がいて、起きてきたら困るから、よーく見てる。

L : どろぼうの草履みたいなのにひもが付いている。

M : 指が長い。伸ばしてるのかも。それと、口が見えない。

(ほっかむりを指さして)

担任：なんでどろぼうはこういうのしてるの？

N : 「あっ、どろぼうだ」ってわからないように、しゃべらないようにしている。

O : シャベったら「あっ誰かいる」っておもわれて、見つけられちゃう。

P : でももう見つかっているよ、だから意味ないよ。

担任：おじいさんとおばあさんはどろぼうに気づいている？

みんな：気づいている。

担任：じゃあ、どろぼうは、おじいさんとおばあさんに気づいていますか？

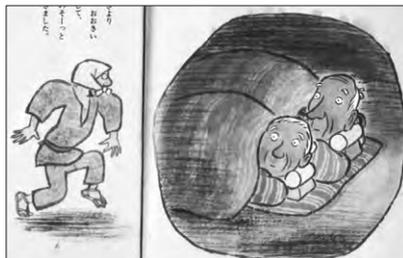
みんな：気づいていない。

担任：なんでそう思う？

J : 寝ていると思っている。

L : 静かだし、気づいていないと思う。

絵本を見ながら、じいさん・ばあさんの表情から読み取れる思い、泥棒の歩き方から見えてくる緊張感など子どもの言葉で意見が交わされている。しかし、ただ子どもたちが気づいたことを言うだけでは深く読み込んでいけない。ここには担任の大事な投げ掛けが子どもたちの読む力を深めていくことになる。ここでのポイントは、泥棒がそうっと歩いていることを読み取っている時に、P



が「でももう見つかっているよ、だから意味ないよ。」とこのストーリーの大事なポイントに気がつくことである。すかさず大和教諭は、じいさん・ばあさんが泥棒に気づいているか？ 泥棒はじいさん・ばあさんに気づいているか？ を尋ねている。このことで、なんでじいさん・ばあさんが泥棒に気づいているのに黙っていたか？ それは『だんまりくらべ』をしていたからということを読み取らせることができたのである。普通であれば、泥棒がきたら大騒ぎになるのだが、ここでは黙っている。そこがこの話の面白いところであり、学級通信のコメントに大和教諭は「そこに気づけたことはこれらの劇づくりにも、とても大きい意味があると思いました。」と書いている。そして、その後のシーンで『だんまりくらべ』の理解がさらに深まっていく。

学級通信「ときどき」 2012/2/13 No.92

『おもち一つでだんまりくらべ』12頁

「このうちは るすだぞ」と大風呂敷をひろげました。

A : だろぼうが笑っている。なんか盗もうかな……って思っている。

B : おじいさんとおばあさんがじっと見ている。

担任：なんでだろぼうがいるのにじっとみているだけなの？

CDE：「だんまりくらべ」してるから！

F : 負けたくないからだよ。

G : おじいさん顔まっかっか。

担任：なんでまっかっかな顔してるの？

H : 大切な物が盗まれそうだから。

I : 「うーん」って我慢しているところ。

J : 部屋が明るいの（絵本なので）だろぼうが気付かないのは変。

担任：明るく見えるけど、だろぼうはおじいさん達に気付いている？

K : 気付いていない。

担任：もし気付いていたら、だろぼうはどうするだろうね？

L : すぐに逃げるよ。

ここで、子どもたちの口から「だんまりくらべをしているから」と答えがかえってきている。泥棒が笑っているとは、きっと泥棒の心境を読み取っているからこそ出てきた言葉と推察される。またじいさんの顔が赤いことで、じいさんの思いも想像していることがうかがえる。

このように時間をかけて文学指導を行



なうことにより、これから挑んでいく大きな『劇の会』に向かって全員の興味づけが行なわれ、絵からの発見したことや、読み取りを通して登場人物の心の動きにも気づいたことなどを、皆で話し合いながら共通の意識をつくることのできるのだと考える。しかし、大瀧副園長はインタビューの中で、「でも作品を本当に理解していくには、やっぱり遊びながらですね。まだほんの入り口でしょう。」と話している。

## 2-2 劇づくり（劇遊び）

### ①まずは『にらめっこ』遊びから

この絵本の中には、じいさんとばあさんがにらめっこをして声を出させるシーンはない。しかし、大和教諭は、この劇遊びに入る前に文学指導と並行して「だんまりむっつりー、二のむっ！」という絵本に載っている唱え言葉のあとに、にらめっこをして相手を笑わせる遊びをクラスで行なっていた。これを劇の中に取り入れ、相手を笑わせる作戦を子どもと考え、保育室のホワイトボードには、たくさんの『だんまりくらべの作戦』が書かれていた（表2参照）。

大和教諭は、学期末総括で人から注目を浴びることを極端に拒否するZのことを「Zは、劇に出ないことが予想されていた。Zの気持ちをどうつくっていくのかは、題材を決める段階から重要でありZが楽しむことがクラスにとっても同じ意味をもつ。Zが文学指導を抜け出したときに、補助教諭がZと『だんまりくらべ』を楽しんでくれて、みんなにその様子を発表してくれたことが、クラスの『だんまりくらべ』のブームとなった。」と書いている。

大和教諭はZを含め全員がこれから活動する劇遊びを、スムーズにスタートさせる工夫を試みている。『だんまりくらべの作戦』は、劇でも使っていくものであるが、今、この遊びを楽しむことで、劇指導がさらに楽しくできるのであると考える。

学級通信で大和教諭は、「この『だんまりくらべの作戦』の遊びは本気で行なうものではなく、たたくふり、おどかさふりとなっています。そして、痛がるふり、驚くふり、とお互い演技をしあう遊びに変化してきています。アクションを大きくしていくと、ちょっと恥ずかしいですが、面白い遊びです。」と述べ、そのまま演技に生かされていくことになる。

### ②場面を増やす作業を行なう。

子どもたちが全員役につくために、ネズミと泥棒のシーンの他に場面を増やさなければなら

表2 『だんまりくらべの作戦』

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・へんがお作戦</li> <li>・こちょこちょ作戦</li> <li>・おしりふりふり作戦</li> <li>・叩く作戦・版画作戦</li> <li>・冷たい作戦・つねる作戦</li> <li>・おどかし作戦</li> <li>・髪の毛引っ張る作戦</li> <li>・豚まね作戦・キック作戦</li> <li>・耳ほじくり作戦</li> <li>・げんこつ作戦・豆投げ作戦</li> <li>・ちくちく作戦</li> <li>・顔の前で「ばちん！」作戦</li> <li>・おなら作戦</li> <li>・こおり作戦</li> <li>・ぺろぺろ作戦</li> </ul> |
|---|

ない。大和教諭は、学期末総括の中に、「いくつか増やす候補も考えていたが、子どもとの相談でこちらの考えていたこととほとんどマッチした。」と書いている。

増やしたのは、第三、五、六場面である(表3参照)。

③それぞれの場面でいろいろな役をやってみる(劇遊び・劇づくり活動)

文学指導が終わった後から約2週間、それぞれの場面を設定し、毎回じいさん、ばあさん、ネズミ役などをやりたい人を募り、好きな役を行ないながら場面作りをし、役を固定せずに色々な役を何度も出来るように展開される。一場面の役は5人程度なので、他の人たちはその5人を見ていることになる。大和教諭は、ニコニコしながら見ている人がほとんどだが、台詞を「自分だったらこういう」とか「こんなだんまりくらべをしたいな」と考えている子、あまり出てこないが細かいことが気になりアドバイスしたりする子、やりたい役があるみたいでそれ以外はやらないと決めている子、「前向いて話しな。」とか「今のおもしろいねえ」と横から声をかけているがいざ出てくるとなると手があがらない子など、それぞれの子どもたちが劇遊びの活動の中で、どう参加しているかを細かく観察し、その様子を学級通信で保護者に随時伝えている。

この劇は『だんまりくらべ』であるから二場面から六場面のじいさんとばあさんは声を出せない。大和教諭は、色々な表現方法を考えていたが、大瀧副園長のアドバイスもあり、『心の声』として陰マイクで気持ちを伝える方法を取り入れることになる。演技手は遊びで行なわれていた『だんまりくらべの作戦』を何にするか考え、動作を工夫し、かなりはっきり動かないと見ている側には伝わらないことを体験していく。また、『心の声』とタイミングを合わせるためにどうしたら良いか、その他の登場人物との絡みをどうするかなど、周りで見ている子や担任、補助教諭とも意見を交わし、良いところを褒めたり、もっとこうした方が

表3 学級通信「どきどき」 2012/2/20 NO.98

第一場面	劇のはじめの場面。となりのばあさんが、餅を持ってきてくれる場面 ・じいさん ・ばあさん ・となりのばあさん
第二場面	もらった餅を食べて、2人で「だんまりくらべ」を始める場面 ・じいさん ・ばあさん
第三場面	「だんまりくらべ」の最中、子どもが遊びにやってくる場面 ・じいさん ・ばあさん ・子ども3人
第四場面	「だんまりくらべ」の最中ネズミが遊びにやってくる場面 ・じいさん ・ばあさん ・ネズミ3人
第五場面	「だんまりくらべ」の最中、道に迷ったさむらいが遊びにやってくる場面 ・じいさん ・ばあさん ・さむらい3人
第六場面	「だんまりくらべ」の最中、おばけが遊びにやってくる場面 ・じいさん ・ばあさん ・おばけ1人
第七場面	泥棒がやってきて盗もうとする。そして、「だんまりくらべ」の終わりの場面 ・じいさん ・ばあさん ・どろぼう3人

良いことなどの話し合いが行なわれ、劇づくりが進んでいく。そのとき補助教諭は、子どもたちの言葉を記録していく。彼らは、この劇遊びを楽しみ体験して、どの役になるかを考えていくのである。

保育室の中には、日々小道具が増えていき、各シーンの劇づくりが展開されていく。色々なアイデアが出され、大きな流れができ、役の個性が確立されていく。大道具も加わるにより劇のイメージが具体的になっていく。

#### ④役決め

劇の活動が始まって3週目の後半、いよいよ役決めである。それぞれ考えてきた役はあるが、色々な役を楽しんできたので空いているところに移るなどしてほぼ役に収まることになるが、「じいさん」「ばあさん」「おばけ」が一人ずつが決まらない。子ども役希望が5人いる。そんな状況で話し合いが繰り返されている。「〇〇は、おばあさん役がうまかった」など推薦してもらい「もう一度考えてきて欲しい」と伝え次の日まで保留することになる。人から注目を浴びることを極端に拒否するZもまだ決まっていない。

翌朝Zと担任が話をする。

学級通信「ときどき」 2012/2/20 No.99

Zと2人で話をしましたが……

Z 「やりたくない」

担任「どうして？」

Z 「間違えちゃうから、いやなんだよ」

担任「なるほど、間違えるのを見られるのがいやなのか……。そんなら2人とか3人で遊んでみるのはどう？」

Z 「う～～ん」

担任「心の声なら顔も出ないし、とりあえずそこからやってみよ！」

Z 「マイクつかうやつ？」

担任「そうそう、今日やってみよう！」

事前に母親から「じいさん」がやりたいと聞いていたこともあり、「じいさん役でやれるところからやる」という方針をZと決めて役決めへと向かうことにしました。

ここでは、Zと大和教諭の2人だけの時間を設けている。母親とも連絡を取りクラス全体での劇づくりができるよう細心の心配りをしている。このあとZはじいさん役になるが、結局舞台上で演じる部分は、代役を立てることになる。そのかわりZは、じいさんの陰の声とナレーション全部を担当することになり見事にその務めを果たすことになる。

役決め2日目、Zが「じいさん」をやることを皆に伝え未決定の「おばけ」と

「ばあさん」をどうするかの話し合いが始まる。

まず、大和教諭は子ども役希望（D～H）の5人に改めて考えてもらうためみんなから推薦を言ってもらうことにする。子ども役は3人である。

「○○ちゃんの、おばけが良かった。」「○○は、ねずみもおばけもみんなうまかった。」「○○のおばあさんも面白かったよ。」など今まで見てきた感想を次々と手を挙げて意見が交わされる。そこでDが「ねずみならやってもいい」と発言する。さて、「ねずみ」の3人に視線がいく。ねずみ役のJが手を上げ「おばけでいいよ」と言い、一度もおばけ役はやっていないのだが、一人役のおばけ役に立候補する。これには担任がびっくりする。それではDがねずみ役にと想ったら「ばあさんでもいい」と言い始めた。Eが「替わるならねずみでもいい」と言い、これで無事収まるかとDに確認すると「やっぱりねずみがいい」となる。話がややこしくなってきたため、DとEと大和教諭3人で場所を替え話し合いを行なうことにする。その間、他の子どもたちは、補助教諭の先生に絵本を読んでもらうことになる。

約15分くらい3人の話し合いが行なわれ、結局Dが「ばあさん」Eが「ねずみ」の役に付くことになる。Dは、ばあさん役が自分にできるか不安な気持ちと、今までのように好きな役を自由にできる劇遊びをもっとやりたい気持ちを伝える。「劇の会が終わってからまたやりたい人が集まってできるよ。」と大和教諭から言葉をもらい、ばあさん役をやる意思を告げたのである。DとEの目に涙がこぼれる。大和教諭は、「ありがとう、そうやって考えて決めてくれたことは、とっても大事なことで素敵なことだよ。みんなに話そう。」と言い大和教諭の目にも涙があふれ話し合いを終える。

教室で絵本を見ていたみんなは、泣いている2人と先生を見て驚いている。「先生の涙は嬉しい涙だよ」と話し2人の気持ちを伝えると、みんなから自然に拍手が起こった。学級通信の中で大和教諭は、「なかなか苦しいですね。なかなかきびしいですね。でも、2人にとっても、そんな2人を見守る周りの仲間にとっても、大切なやりとりです。他の子も同じように悩んで決まった役です。」と結んでいる。

それぞれが大事な役であり、子どもたちの思いもそれぞれである。Dは、ばあさんを自分ができるという心配と、子ども役への思いでしばらく食欲をなくすが、その後、他のばあさん役の子が熱で欠席したとき、自ら代役をやりたいと名乗りでて、自分の場面と代役の場面の2カ所を見事にやってのけたのである。

大和教諭は役決め前日に、「今まで楽しんできたことを思い出してほしい。誰かが○○だから自分も○○ではなく、自分のやりたい役を考えてほしい。」と伝えていた。また2日間にわたり考えた末、別室で2人との話し合いが終わった後でクラスの皆に、「じゃんけんでは決めたくないよね。」と話した。全員が納得して1週間後の発表に向かっていくためのステップとして、これらの時間はとて

も大切であったと理解する。

## 2-3 舞台での練習

### ①初めての舞台からの展開

舞台の高さは30cm、上手、下手、舞台の袖を説明してから体育室につくられた舞台に初めて上がる。スポットライトを浴びまぶしさも体験する。みんなで並んで一人ずつ「おはよー！」と声を出す。それから各場面の練習を行なう。今までの保育室と広さも違う。奥と前だとどちらがよく見える？ライトが当たって手で目を隠すと顔が見えない。どっちを向いてしゃべったらよく聞こえる？などの説明もありこれから本番に向けて緊張感・期待感が高まる。今までは遊びながら場面を作ってきたが、ここからは役が決まり今までの積み重ねてきた体験を参考に台詞が作り上げられていく。もちろん台本はない。

本番まであと6日、決まった役で劇が展開される。大和教諭は、その様子を細かく学級通信に書き保護者に進行状況を伝えている。ほぼ毎日全員の劇づくりの状況を報告している。

学級通信「どきどき」 2012/2/21 No.101

〈侍の場面〉侍の場面はほとんど口を出しませんでした。じいさんAは、ちょこちょこ作戦でばあさんBを笑わせようとします。ばあさんは、水をかけて「冷たい」と言わせようとします。心の声はCとDの担当です。声に合わせた演技がうまいことでできています。水掛けでそーっと近づけばあさんの動きがよかったですね。

侍は道に迷っているところで新しいアドリブが加わります。侍E、Fが道を行き過ぎてしまい、それを残りの侍Gが「おいおい、こっちだこっちだ！」と呼び止める場面ができました。みんなの笑いがうれしそうな3人でした。刀でじいさんとばあさんをおどかしているのですが、こわがっている2人がまたおかしい。Eが「なんでそんなにあやまるんだ！」と侍達は、声をだしてくれないことを不思議に思うのですね。

〈こどもの場面〉じいさんはたたかれても、声を出さずに床をたたいて我慢して怒っています。

新しくしたところがあります。「前であそびをしながら出てきたら？」と伝えると3人で考えて「だるまさんがころんだ」をすることにしてJが鬼になることも決めていました。あそびながらやってくる場所は、初めてだったので、3人が照れながらも楽しそうにしているところが印象的です。K「なにであそぶ？」L「だるまさんがころんだしようよ」J「いいよ わたし鬼やる」とセリフわけも自分達でしてきたみたいで驚きました。

〈泥棒の場面〉始まる前、泥棒の3人は色々相談しています。S「俺が先行

くからね」、T「風呂敷は俺が持つ」、U「この家にしようって言おう」など相談する3人ですが、いざ舞台になると、恥ずかしさでふざけてしまがちでした。3人が逃げるところは、走り回ったり、ぶつかったり、転んだり、開いていないドアにぶつかり転んだりと笑いどころになりそうです。

じいさんPばあさんQのだんまりは、派手で安定感があります。それに2人はしっかり泥棒が来て、盗むところを見て「大変だ」という顔や、「どうしよう」というしぐさをするんですよ。顔を見合わせたり、じいさんが「ねえねえ見て見て」とばあさんの肩をたたいたりするんです。

子どもたちは、今まで交代でやってきた劇遊びがあるからこそ、自分自身で台詞を選ぶことができる。そして自分で納得のいく言葉を日々確立していく。同じ場面のチームでどう構成するかも子ども同士で考えている様子うかがえる。しかし、ここまで子どもたちが演じられるようになるために、その陰で担任がその子どもの特性にあった言葉掛けやきっかけなどを丁寧に指導してきたのである。大和教諭と補助教諭は、役が決まる前の劇遊びのなかで、実際に子どもの前で「ねえ、みんな、水掛けられたらどうなる?」「どういう風に震える?」と言って演じて見せることをしていた。真似しているうちに、子どもたちから全然違うものが出てきたり、色々な震え方を楽しんできた。それを今度は舞台の上でどの場所で、どのくらい大きく表現すれば伝わるのかを体験するのである。また、侍の場面では、「お侍の人たちが何か言いながら出てきた方がいいよね」と投げ掛けたことで、「何か遅くなってきたな」とか、「夜になってきたな」とか、「こんなところに家があるぞ」など自分たちで考えてきた台詞がつくられていくのである。インタビューの中で「そういうのが子どもたちの中からいっぱい出てくるのを見るのはやっぱり楽しいです。」「それで次の人も同じことを真似してやる人がいたり、全然違うことをやってみたりというのを見ると、やっぱり子どもって繋がっているというか、見ながらできていくというのは面白いと思う。」と語っている。

インタビューで大瀧副園長は、「舞台の話し方は普段のしゃべり方とは違う。ゆっくり大きな声でどちらを向いて話すかという演劇の大事な部分は、子どもはまだイメージがないから教師がやってみせるしかない。」と力説し、実際舞台に入ってからの練習は、すべて大瀧副園長と担当教諭が一緒に指導していた。

舞台の上での練習では、どうしたら良く聞こえるか? 客席からどう見えるかを考え、立ち位置や登場するタイミング、どのきっかけで退場するのか、暗転するまで動かないのか、など劇としてかなりレベルの高いことが要求されていく。「上手」「下手」も覚え、水曜日ぐらいからは「いつ、どこで、何をするか」ということが舞台でわかっていくことでペース配分の流れができ、自分でどんどん言葉を替え台詞を楽しんでいく様子がみられる。ここまでいくともうやるのが面白くなり、明日はこうやってみよう……となる。また自分たちなりにフォローし

合っていくという姿が見られてくる。木曜日に全員舞台裏に入り本番同様に通し練習が行なわれる。

それを教員たちは面白がり、学級通信に載せて保護者とともに愛情を持って見守っている。

子どもたちは、緊張感が高まりドキドキや不安感を体験していく。

## ②初めての衣装

火曜日には、衣装を着る。子どもたちは、衣装をもらい表情は引き締まる。着物のたたみ方を教えてもらい自分のロッカーでしっかり保管することなど管理についても丁寧に伝えられる。「きれいにたたんでロッカーにしまう姿を見て、皆が劇を大切にしている気持ちが良い伝わってきた。」と大和教諭は通信に書いている。

大半の子どもたちは、衣装を着たことで高揚している。せっかく衣装を着たのに、時間切れで舞台練習ができなかったグループがあった。「着た意味ねーじゃん!!」と捨て台詞を残しホールをあとにした。

一方、どんどん発表に向けて現実的になってくることで、ストレスを感じている子どもも見えてくるのである。

## 担任学期末総括から

### ドキドキとワクワクの狭間で 子どもたちのドキドキする姿から

Tの発言 「この衣装きるならやらない」 本番舞台袖で「やらない」

舞台が始まってから泥棒役のTは明らかにいつもと違い、些細なことでもつかり、いざこざも増えた。何かと「もう劇やらない」と言ったり「劇つまんない」とか「もう出来るから大丈夫」という言葉が聞かれた。火曜日の朝「先生衣装が嫌だ」「ズボンがチクチクするからこれじゃあやらない」と言って4日間着ないで舞台に行くことになるが、衣装を着ることがとても恥ずかしいこと、でも本番に向けては泥棒役をやらなくてはこの2つの気持ちが良く伝わってきた。「本番は着るから、衣装着ないでやるね」というやりとりを毎朝していたが、そうして不安な気持ちを伝えていたのだと思う。舞台では照れ屋な泥棒達が日に日に自分達の演技を固めていったので、はっきり言って心配はなかった。Tの不安に毎朝付き合うと言うこと。「オレ全然緊張しないから」「ピアノの発表会とかもしているから、大丈夫なんだ」と本番が近づき毎朝やってくるT。家では少し甘えん坊になっていた様子を聞いて「頑張っているなあ」と思った。

大和教諭は、衣装を着ることを強要しなかった。泥棒役のTの不安な気持ちをしっかり受け止め、あと2人の泥棒役にも不安にさせず子どもたちと向き合っていた。「頑張っているなあと思った。」という大和教諭の温かい見守る気持ちが、

Tに伝わり踏ん張れたのではないかと思う。

一方、人前に出るのが苦手なZは、ナレーションに挑戦している。劇のはじめや場面が変わるごとに入るナレーションは重要である。Zは舞台の袖で字を見ながら大切な言葉をゆっくり話していた。

大和教諭は学級通信のコメントで、劇をしていると色々な人に個人的に声をかけることが多く、そこでぼそっと出てくる不安は、子どもたちがいいものをつくりたい、素敵な自分を見せたいという思いが強いからであり、本番でそんな自分を表現できるように寄り添っていきたいと話している。

子どもたちは、やはり大好きな親から認められたいと切に願っている。そんな思いを教師はしっかり受け止め一人ひとりに丁寧に向き合い、背中を押している。本番を前に大和教諭は、保護者にこんなメッセージを送っている。

#### 学級通信「どきどき」 2012/2/26 No.107

子どもたちにはそれぞれ色々な思いがあります。笑って欲しいところ、見て欲しいところ、不安や緊張もありながら、それよりも強い期待があります。自分達で作ってきた劇に自信があって、見せたい気持ちがあるからです。見逃さずに見てください。子どもたちにとっては、お母さんやお父さんに見せることに期待を持ち、日曜日を目指して劇をつくってきました。ですから、皆さんは、子どもたちにとって最高のお客さんです。子どもたちの緊張や不安のドキドキは、見せたい、笑わせたいワクワクになっています。

子どもは、幼稚園の顔と家の顔を持っている。期待と不安を持った子どもたちに周りの大人はいかに援助していくのが重要だと考える。大和教諭は毎日のように学級通信を送り、全員の子どもの様子を保護者に伝えている。その重要さを読み取ることができる。そして保護者の方々に、子どもがこれだけ頑張ったことを理解してもらい、しっかり抱きしめてたくさん褒めてあげてほしい。と言う思いが切に伝わってくるメッセージであると思う。

#### ③本番土曜日

土曜日は、全園児の前で発表を行なう。演じている子どもたちにもそれぞれの思いがあり、笑って欲しいところ、見て欲しいところなど、色々な期待がある。そんな劇を見せるために、観る側にも諸注意がある。

大瀧副園長が子どもたちに話す。

- ・知っている人が出てきても「○○ちゃんだ！とは言わないでください。みんなそれぞれの役をやっています。」
- ・面白い部分は、たくさん笑ってください。
- ・人が変わっても同じ衣装を着ている人は、同じ役です。

以上のことを話し、劇の会が始まる。1組2組とそれぞれ30分強の時間がか

かるが、3歳児、4歳児はよく見ている。星1組の子どもたちは在園児の前で劇を演じ、緊張したが楽しかったと話している。

最後の1週間、風邪で休む子が増え、この日も無念ながら欠席しなければならぬ子がいた。しかし、子どもたちは代役を楽しんでいるかのように見事に演じていた。役決めて自信がないとばあさん役を受けるか迷っていたDは、第一場面のばあさん役を生き生きとやり切った。

本番2日目、いよいよ保護者に見せる日曜日。火曜日から風邪でお休みしていた第一場面のばあさん役のHが4日間ぶりに出てきた。舞台での練習はほとんどしていないが、小道具の野菜が抜けないというアクシデントもペアのじいさんと難なく乗り切り無事終えることができた。誰がいつ抜けても復帰しても演じる力はこの1ヶ月で充分備わっているということであろう。

大和教諭は、学期末総括で次のように書いている。

#### 担任学期末総括から

本番に向けて、「早く見せたい」「楽しんできたものを見て欲しい」「喜ばせたい」「笑わせたい」という自信や期待がうかがえる。どちらも必要なことだと思うが、特に後者の期待感自分達が身につけてきたものだけに、この自信がないとドキドキを乗り切れない。一緒に仲間とドキドキした思いを共有し合いながら、劇を迎えた事が実感できた。

星1組の子どもたちは、大和教諭の援助によって、子ども同士の共感性を育てていくことができたと思う。舞台では、自分の置かれた役割をしっかりとらえ、自分の判断でそれぞれが演じ、思いのこもった場面がつけられた。その小集団が組み合わせさり全体が調和され、一つの立派な劇に仕上がった。それぞれのアドリブは、決して本筋からそれないものでありそのアドリブに周りがついていけるたくましさを感じた。これは、今まで筆者がとらえてきた劇のレベルを遙かに上回るものであった。

そして、この劇の活動を通して、共働性の育ちを見ることができた。

### 3—— 林教諭クラス 星2組 『番ねずみのヤカちゃん』の取り組みより

一方、次の年に行なわれた、林教諭の『番ねずみのヤカちゃん』の子どもの様子も紹介する。

劇指導の全体的な特徴は、大和教諭の実践で検討済みなので省略する。

#### あらすじ

あるところにお母さんねずみと4匹の子ねずみがいた。子ねずみのうち3

匹はおとなしく静かな子だが、4匹目のねずみは「やかましやのヤカちゃん」と呼ばれていた。ヤカちゃん一家はドドさん夫婦の家の隙間に住んでいた。大きくなった子ねずみたちは、おかあさんに自分で暮らすように言われ、ドドさん達に気づかれないように、音を立ててはいけないことを言われ、ねずみ取りや猫に注意することを歌で説明される。一方、ねずみの声に気がついたドドさんは、ねずみ取りや、猫を飼ってねずみを捕まえようとする。チーズを探しに家に忍び込んだヤカちゃんたちは、お母さんの歌を思い出したおかげで捕まることなく巣穴に戻る事ができた。

ある晩泥棒がドドさんの家にはいる。チーズを食べようとする泥棒に向かって大きな声のヤカちゃんが「どろぼう！」と叫んだ。驚いた泥棒は逃げていく。それ以来番犬ならぬ番ねずみとして、ヤカちゃんは、ドドさんの家で堂々と暮らしていけるようになりました。

### 3-1 劇づくり (Y君の出来事を中心に)

絵本の冒頭「3匹はおとなしくて、しずかな子でした。でも4匹めは、『やかましやのヤカちゃん』とよばれていました。」と書いてありヤカちゃん以外の子ねずみには、名前がない。まずは、キャラクター作りをしていくのだが、なかなか定まらず二転三転することになる。結局いつもニコニコポーズをとる『ニコちゃん』、あわてんぼうで良く転ぶ『あわちゃん』、忍足で慎重な歩き方をする『しのちゃん』、やかましやの声がどうしても大きくなってしまう『ヤカちゃん』に決定。(本番1週間前)それぞれのキャラクターが見ている人たちにわかるようにと子どもたちが意見を出し合い考えていく作業を丁寧に行っていた。

お母さんねずみは、一人でこれからのストーリーのすべてを説明していかなければならない。歌もねずみ取りに気をつけることと猫に気をつけることを2コーラスうたわなければならない。それも会場に向かって演技をしながらである。歌詞は、どう気をつけたら良いかを説明しているものであり全部覚えるのは難しい。色々悩んでお母さん役になったM。演じているときはとても楽しそうに見えたが、家での練習は相当なものであったそうである。その声につられ、全員が歌を覚えていくことになる。

場面ごとに好きな役をやっているときに、周りで見ている子どもたちが腕組みをし「こうしたら？」という演出家が出てきて、それぞれの役のキャラクターや動き、歌をうたい出すきっかけなどが確立されていった。しかし、場面作りをしている最中、一部の子どもが劇を見ず遊んでしまう姿やわ



舞台練習の風景

ぎとふざけて演じる姿が見られた。そもそも、やかましい子が多いクラスだからこの話をやろうと思った林教諭は、幾度となく劇遊びの進行がうまくいかず中断しては話をしてしたが、役決めの前、それを不満に思う子どもたちが「言いたいことがある!!」と手を上げる。Yを含む数人が、自分の出番が終わると遊んでしまい、それが気になって劇が観られない。遊ぶのはやめてほしい。それに対して遊んでしまう子たちの言い分は、つい人が遊んでいるとつられてしまう等々……そんな討論が繰り返されている内に、猫の仕草はもっと猫の手みたいにした方がいいのでは……と劇づくりの会話になり、それでも最後は、自分の出番が無かったり終わってしまったからと言って劇を邪魔するのはやめよう確認し、次の日の子どもたちは、今までと少し違っていた、と学級通信に記されている。

しかし、つい騒いでしまうYもヤカちゃん役になり、とても頑張っていた。大声で「うん、わかったよ、おかあさん!」と言ったあと他のねずみに「しーっしーっ!!」と言われてうなだれる姿は、とても良い演技であった。自分が演じるときの楽しさを知ること、徐々にクラスがまとまってくる。

### 3-2 本番

#### 発表会 日曜日のアクシデント

とてもヤンチャで賑やかなY君。林教諭は、この子がいたから「ヤカちゃん」の本をやろうと思ったという。練習では、ヤカちゃん役に熱が入りよい演技をしていたのだが、本番での猫が眠っているシーン、ヤカちゃんとニコちゃんがねずみ穴から登場して始まる所でヤカちゃんが出てこない。客席は暗く、舞台の部屋も薄暗い。しばらくの間沈黙状態。1~2分ほど経過、猫2匹は相変わらず眠っている演技を続けている。幕の陰から大瀧副園長が登場、「緊張のあまり出られないのでしばらくおまちください。」とのこと。さらに待つこと何分か。結局一度幕をしめることに。その後また大瀧副園長が出て来て幕が開いたり閉まったり……結局6分半後再度大瀧副園長が出てきて「ヤカちゃんが2人でスタートします」とのこと。2人のヤカちゃんとニコちゃんが無事再会され、無事劇は終わった。

Yは、直前まで舞台裏の歌は逆さまに大声でうたっており、けっしてやりたくないから出られなかったわけではない。舞台に出てからは、寝ている猫にとっても元気にいたずらする演技をしていた。劇終了後保育室に戻ってきて、よく頑張ったねと言う話に他の子が「大失敗だ!だって途中で止まった」という意見がでた。しかしこの一致団結した思い出は強く、卒園式に向かうときも劇の歌をうたい団結して会場に向かった、と話している。

このクラスは、年長になってから絵本作りを楽しんでいる子が増え図書館をつくりたいと言う意見も出たが、合宿、運動会、プロジェクト、劇の会と年長の間に課題が多く、希望を叶えることができなかった。また、一つひとつに乗り越え

なければならぬ葛藤もあり、やるからには乗り越えさせなければと頑張ったが、年長児を初めて受け持った林教諭にとって、子どもたちにとって葛藤して乗り越えることとは何なのだろうと考えさせられる一年だった、と話す。

林教諭は、この劇の会を振り返り、前半のプロジェクト<sup>9)</sup>活動からの流れや、3歳児のクラスからの「何かあったら相談し、どうするかを話し合う」ということが当たり前になっていたこと。また、石や花など見せたいものの時間をつくり、面白かったことを聞いてもらう時間などの『対話的保育』<sup>10)</sup>を積み重ねてきたからこそできたことだと思っていると話していた。

『番ねずみのヤカちゃん』の劇も、『だんまりくらべ』に劣らず素晴らしい劇に仕上がっていた。それぞれの役の子どもたちは、自分の役をしっかりと理解し自分の言葉で演じきっていた。何より途中でストップしても緊張感が途切れず、頑張ってきた劇を成功させたいという強い思いを持って最後まで演じていけたと思う。長い間舞台に取り残された猫も猫であり続け、もう一人のヤカちゃんはYとともにニコちゃんに誘導され、練習した成果を発揮していた。3パターンの違う歌詞を全員が覚え、歌声がホールに響き保護者たちの涙を誘っていた。

3年間の積み重ねがあり、その上でまた皆で対話しながらつくってきた劇、ここにも確かに協働的学びを見ることができた。

#### 4——考察

いずれのクラスも発表した劇は30分強の超大作である。幼稚園生活のあらゆる活動の集大成と言っても良いのではないだろうか。和光幼稚園の劇指導の特徴として3つあげたが、これらの活動は、長い間の和光幼稚園・和光鶴川幼稚園の教材研究から始まり実践研究の積み重ねがあったからこそできてきたものと考えられ、子どもたちにとっては、3年間の対話的保育があつての成果といえる。

##### ①文学指導を丁寧に行なっていること。

まずは、劇指導にふさわしい絵本(題材)を探すところからポイントになると考える。大和教諭は、この担当クラスで何を表現したいかを考え、注目されるのが苦手なZがどう劇に向いていけるか、楽しく遊びながらつくっていける題材を考えた。結果的に舞台上で演じることはしなかったが、ナレーションや心の声で

9) それぞれの幼稚園では、年長になるとプロジェクト活動に取り組んでいる。4月から始まり『プロジェクトを伝える会』がある12月まで各クラスでテーマを決め活動が展開されていく。その様子は、2011年度和光幼稚園・年長・星2組のプロジェクト活動「『海の生き物の世界』の取り組み」を林(立教女学院短期大学)がまとめ、和光鶴川幼稚園・年長・星1組、2組のプロジェクト活動「『舞台』「エルマーランド」の実践について」を浜田(白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程)がまとめた。

10) 加藤繁美(山梨大学)「いまなぜ〈対話的保育〉か」『和光大学現代人間学部学部紀要2』12-14頁

Zは活躍し、遊びを流行らしていくきっかけをつくったところは、大きな意味があると考えられる。また、丁寧に文学指導をしていったことで、このストーリーを理解しそれぞれの役の思いや心の動きなどに気づくことができ、全員が役に付けるよう場面を膨らます作業を、子どもとともに考えることができた。もちろん指導者は、はじめから構想をもって挑んでいるが、『だんまりくらべの作戦』などの遊びを行なったことで劇づくりのベースができていったと思われる。その後、じいさん・ばあさんの役作りも、この絵本からのイメージを共通に持つことで複数の演者が繋がっていただけるのであると思う。

林教諭は、やんちゃな賑やかな男の子が多いこのクラスに、ヤカちゃんを重ね合わせた。彼らを主役にすることで劇づくりに挑んだのである。この作品は、絵本といえども68頁もあり文字数も多い。絵も白黒の頁とカラーの頁が交互に出てくるつくりになっている。ヤカちゃんの声の大きさは、絵本の中では文字の大きさと表現している。お母さんの教えにそれぞれの子ねずみが「うん、わかったよ、おかあさん」と返事をするのだが、ヤカちゃんだけがどうしても声が大きくなってしまい、周りの子ねずみから「しー！！」言われてしまう。そのヤカちゃんのうなだれている絵は、ヤカちゃん役の複数の子どもたちが演じることで見事に再現されている。また、ヤカちゃんが大声でしゃべってしまうと、他の子ねずみたちがひっくり返る絵本の絵は、何度も場面に登場し笑いのシーンとして盛り上がったところである。今、劇が終わり絵本を読み返してみると、絵本の絵が子どもたちの場面とオーバーラップして見えてきてしまうことが面白い。泥棒のシーンでは、同じ舞台に立っているが、泥棒はねずみに見られていることに気がつかないが、ねずみはしっかり泥棒を見ているという演技をしている。これも文学指導でそれぞれの関係がはっきりしているからこそできる技である。

絵本から、絵の意味、言葉の意味、またそこに隠されている時代背景や文化などをどう読み取っていくのかを丁寧にすることで、劇遊びの発展の仕方が大きく変わっていくと思われる。子どもたちがアドリブを言い自由に表現している裏には、あくまでも原作に忠実な文学指導があったからだと考えられる。その役の存在する意味を理解し、その子なりの経験や周りを観察することで子どもたちが自分の世界に置き換え台詞を確立させていく。そして自分で考えたからこそアレンジが効くのであろう。このように絵本から読み取ったことを自分の言葉で表現していく作業は、まさに国語教育である。5歳児ながらレベルの高い教育だと思うが、子どもたちは勉強をしている感覚はなく、あくまでも遊びの発展でできあがっているからこそできていくのだと考える。

②劇づくりに際し、子どもの日常の様子や思いを大事に考えていること。劇遊びを通してセリフを導き出し確立していくことで、劇遊び・劇づくり・脚本作りが一体になっている。

まず、この劇づくりを見ていて一番素晴らしいと思ったことは自分の言葉、自分の動きで役を演じきっていく姿が見られたことだ。

文学指導が終わり、その後劇遊びにはいり2週間強、何度も色々な役で遊ぶことができる。またそれを見ている側も意見を出し、やっている以上に学ぶことになる。本番の舞台袖で自分の役ではないが、台詞を言っている光景は良くあることである。だからこそ代役が問題なくできるのだが。

この時期は、まだ舞台に乗るプレッシャーもなくそれぞれの思いを表現し、しかしその中で大事な台詞が確実につくられていく。ここで指導者は、ただ子どもたちの動きを見守るだけではなく、実際に演じてみたり、台詞を誘い出す言葉掛けをすることが重要になってくる。これらのやりとりが劇づくりのポイントになると思われる。ゆえに、教員の説得力のある演技力も必要になってくる。どちらの劇も同じ補助教諭が入っていたが、この教諭は、とても表情豊かに演じていたのが印象的であった。

その後自分の役が決まり、今まで培った台詞を自分のものとして確立していく。しかし、子どもたちの台詞は1パターンではない。劇を進めていくための言わなくてはいけないセリフはあるが、内容を踏まえた上で自由な表現を楽しむ姿が多く見られた。自分の言葉で表現していく姿は、丸覚えしていく劇とはまるで違う。このように作りだされた台詞は、アクシデントがあってもアドリブで対応できるのである。

『だんまりくらべ』は、じいさん・ばあさんが黙って演じるという異例の劇である。しかし、台詞を言わずに仕草で表現することが、演じる力を開花させた。そして心の声という陰マイクでその演技を支えることになった。これは、教諭もやってみて驚いていることだが、パントマイムのように動かなければ相手に伝わらないことで、逆に演技がとてもわかりやすくなった。また台詞がないことで動きに集中できその結果、たたく仕草、痛いところえる仕草、水を掛けられて寒いと震える仕草、泥棒が入り布団の中から心配そうに見ているじいさん・ばあさんの表情など書ききれないが、どれも自分の動きを確立し表現しようとしたすばらしい演技だった。もちろん台詞のある所でも、すばらしいところはたくさんあった。

また、『番ねずみのヤカちゃん』では、ドドさん夫婦の台詞がとても面白かったのだが、ここでも自分の言葉で表現している姿を見ることができた。子どもたちは家で両親の観察をもとに夫婦の芝居をつくりあげていた。だから夫婦の会話はアドリブが付きにくい。奥さん「飲みすぎないでね……酔っ払っちゃいますよ……」ドドさん「おまえも飲むか？」奥さん「いりませんよ！！」などほほえましいものがたくさん出てきた。

ドドさんとドドさんの奥さんは、絵本にはほとんど顔が描かれていない。下半身か後ろ姿、窓越しにうっすらと登場する程度である。今回の劇では、ドドさん

の奥さんがしっかり者でドドさんが楽天的な感じになり、またそのことが会場を沸かせていた。

また、これらの劇づくりに重要なのが、作品の特徴を生かしていく構成員力なのである。

大和教諭は、「だんまりくらべ」遊びを通して、場面を繰り返していく構成を考えた。陰マイクというもので子どもたちの興味もわき、これが演技手と呼吸を合わせなければならないことで、劇に一体感が生まれテンポ良くまとまりのある構成になっていった。同じ題材でも、どう劇を構成していくかで見栄えは全然違うものとなる。

林教諭は、全員で歌をうたうことを柱にした。この歌は劇を進めていく上で大事な台詞を曲にしてうたっている。ゆえに3コーラスある歌詞が皆違うものとなる。絵本の歌詞をできるだけ忠実に筆者がメロディーを付けたのだが、正直園児が全部うたうのは難しいと思った。しかし、結局全部を全員がうたうことで、音楽が全体を引き締めまとまりのある劇になっていった。そして子どもたちの歌声が観客の胸を打った。これも林教諭の構成が素晴らしかったのだと考える。

これらの劇をつくっていく上で要になっているのが、先生と子どものやりとりの中での対話である。

一つひとつの台詞をつくっていくことも、的確な投げ掛けをしていくことも対話から成り立っている。指示してやらせていくものでなく対話からつくっていくことが要となっている。

つくっている課程で演出にももの申す子もいた。『番ねずみのヤカちゃん』では、ねずみ取りや猫に捕まらないために、お母さんねずみが歌をうたっているのだが、本番3日前のある舞台練習のとき一人の女の子が筆者の所にやってきて「お母さんが、子ねずみに歌を聴かせているのに、子ねずみが一緒にうたっているのは、変じゃない？」と話してきたのである。「……そうだねえ……」と煮え切らない返事をしたら、その子は筆者では解決できないと考え、林先生の所へ駆けていきクラスで話し合ったようである。結局、舞台裏にいる子どもたちを含め、歌は全員がうたうことになったのだが、本番までこのようなやりとりは続き、『みんなで作っている劇』になっていくのである。林教諭が、「年少のクラスの時から何かあったらみんなで話し合う、疑問に感じたら声に出して言うことの積み重ねが実を結んでいる」と話していたが、まさに対話的保育が見えた場面であった。

### ③本番があるということ

3歳児、4歳児でも本番は行なわれるが、保育室でごっこ遊びを行ない、そこに保護者が観に来てアットホームな感じで参観する。しかし、5歳児になると舞台上上がり衣装をきて保護者の前でライトを浴びて本番を演じるのである。

では、本番があるということの良さと難しさはどんなところだろうか。さんど

ん遊んできた劇も役決めになると、緊張感がはしる。それは、本番が見えてくるからである。この本番があることで、最後の1週間は乗り越えていく山がいくつもあると思われる。大和教諭のクラスでは、役決めにドラマがあった。ばあさん役に移ってくれたDが「みんなと交代交代でやっていく劇が良かった」と言っている。結局本番でもDは立派に演じていくのだが、劇の活動の中で劇遊びから本番への意識が変わるのが『役決め』であり次のステップのはじまりとも言える。ここからが劇の醍醐味でもあるが、プレッシャーという大きな魔物も待っている。どの子もその役に至るまでの思いは同じである。親たちに自分の一番良い姿を見てもらい認めてもらいたいという気持ちは誰しもあるはずであり、だからこそプレッシャーを感じるのである。

『劇の会』という名で年長児だけに行なわせている意図は、年長児ならこのプレッシャーを乗り越えそれなりに教育的意義があるから行なわれているのだと考える。しかし、その意識は個人差があり、教師は不安定になっている子どもに対して、慎重に距離を持ちながら信頼して見守っているように見えた。

舞台上に乗ると、大瀧副園長はすべてに立ち会う。そして、立ち位置や話す向き、声の出し方など見せるための劇指導を行なっていく。子どもたちも観客に見せる意識が高まりますます緊張感がはしる。ただその雰囲気の中でも毎日台詞を変化させ楽しんでいる子もたくさんいる。そして、それは劇遊びではなくまさしく演劇なのである。良いものをつくって親たちを驚かせたいと期待している気持ちがあるからこそ楽しめているのだと思われる。そんなわくわく感は、この活動を見学させていただき、たくさん見ることができた。しかし、プレッシャーから衣装を着ないなど、なかなか前へ進めない子どもも見られた。

大瀧副園長は、インタビューで自分の息子の体験を話している。腕白な割には劇の活動を一切拒み、担任もその姿を受け入れあまり後押しをしなかった。結局本番も頑張ることなく過ぎ、終わってから「よく頑張ったね」と言われても、本人がやれなかったことを一番わかっており、何言われても嬉しくない。この様子を見て、もう一押しすることの大事さを思い知ったそうである。また大瀧副園長は長年子どもたちを見ている中で、やりたいけど恥ずかしさの中で葛藤し、本番前日あたりで一押しすることで覚悟が決まり、本番当日突然やっつけのける例はたくさん見ているという。

このように教師は子どもたちの背中を後押ししていくのだが、さまざまなプレッシャーを緩和するための配慮が色々隠されている。

まずは、観客を制限しそのクラスの保護者のみ観ることができることである。これは、どちらのクラスが良かったという比較のものではなくその子がどう劇に関わりつくってきたかという方向性をはっきりさせるためにも、重要なシステムであると考えられる。

また劇の会において保護者との連携も重要な役割を担っている。その太いパイ

プが学級通信と親和会（保護者会）である。まず劇遊びが始まった日に保護者の参観がある。この時点では、文学指導は終わっているものの、どう動くか、どこで何を言っているのかがまるでつかめていない。そんな状況をあえて参観させている。これはこの先、子どもたちがどう変化していくかをしっかり見てもらうために必要なことと理解する。

また、本番が近づいてくるとほぼ毎日のように通信を出している。前記したが、台詞が決まっているものではないので、練習の時に出てきた教師がいいと思った言葉でも、本番で出るかどうかはわからない。教師が子ども自身から出た言葉を記録し面白がり、温かく見守る様子を保護者に伝えることにより、教師と保護者との意識の共有や連携も含め、保護者も本番を見る心構えができるのであると思う。

劇をつくっていく上で笑いをとることも、子どもたちにとってとても嬉しいことである。自分の場面でなくても、「ここが面白いところなんだよね」と舞台裏で話している子もいる。よく行なうのは、ぶつかって転ぶシーンである。土曜日に全園児の前で発表するときは、何回転んでも子どもたちは大ウケしてくれる。しかし大人はそうはいかない。また逆にちょっと大人びたセリフは、子どもには反応しないが、大人には面白く笑いが起こる。この時、前日にあんなにウケたのにウケなかったことや、言い間違えたことで笑われて傷つくこともある。子どもにとっては、ちっとも面白くないのに笑われたと思うのである。

劇が始まる前に、諸注意がある。「劇の役をやっているので、『〇〇ちゃんだ。』と言わないでください。面白いところはたくさん笑ってもいいですが、ちょっと言い間違えてそれがとてもかわいい姿であっても、そこは我慢して笑わないでください。」など子どもたちがやりやすい環境づくりを配慮していることも大事なひとつである。

このように見せる劇ではあるけど、観客もつくり手と視線を共有できるという子どもたちを温かく見守る環境作りが至る所になされている。この環境があるからこそ子どもたちを葛藤させても乗り切ることができるのではないだろうか。

林教諭は学級総括の中で、「劇の活動の中で子どもたちを見ていて、当日はやりきるが、取組みの課程の中では不安や緊張に耐えられずに、自分の気持ちをコントロールするのが難しいなど感じる事、人との関係で自分の気持ちをうまく表現できずに困っているな……と感じる姿がよくあった。」と書いており。インタビューでは、「答えはまだ見つからないが、5歳児に葛藤して乗り越えさせる意味とは何なのだろう」という言葉に重みを感じた。

和光幼稚園の年長児は、前半のプロジェクト活動に加え『合宿』『運動会』『プロジェクトを伝える会』があり、最後に一番大きな『劇の会』がある。子どもたちはそれぞれに色々な質の葛藤があり乗り越えて来ている。

劇をつくっていく課程でも、達成感、充実感などの楽しいことも多々経験する

が、時には挫折感やプレッシャーなどの重圧からの葛藤、繰り返し苦難を乗り越えていかなければならない体験も経験する。教師にとってもどこまで後押しするのが良いのか、難しいところである。どの年齢にどんな葛藤をさせ乗り越えていくことが大切なのか。個人差がある中で一つの課題に取り組むことはとても慎重に行なわなければならないことでもあり、これからの課題になるのではないかと感じた。

## 5——まとめ

幼稚園から小学校への接続期としてこの時期をとらえるならば、人との関係や周囲の環境が大きく変化することに伴う戸惑い・不安・期待などを丁寧に受け止めながら、指導者や友達との関わりを基盤に主体的に学ぶ姿勢をはぐくむためにも、発達の過程を見極めていくことが大切と考える。舞台に出られなくなったYは、卒園後遠くに引っ越し、皆と違う小学校へいくことにとても不安を持ち、そのことでわざとふざけたり極端な行動に出ていたと林教諭は分析している。舞台に出たいのに出られなくなった6分間の林教諭と大瀧副園長の舞台裏は、はかり知れない思いがあったのだと推察される。

全員が動かないと先に進まない『劇の会』。ここには子どもたちと保育者が一体となって一人ひとりの思いや疑問などを充分に出し合いながら話を進め、納得して一つの目的に向かっていく学級集団の育ちがある。子どもに寄り添って一人ひとりの思いを大切にしながら学級全体で共有し、結果として子どもたちの社会性や情緒的な発達を促すことができると考える。これはまさに、接続期の協働的学びとして有効と考える。

付記：本研究に際し、長期にわたり観察を快く受け入れてくださった和光幼稚園の鎌倉園長先生、大瀧副園長先生、藤田先生、大和先生、林先生、そしてその他のすべての教職員の方々、子どもたち、保護者の方々に深く感謝をいたします。

[ごとう のりこ]